ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

　そして、明後日の土曜日。

「結構混んでいるな……」

「ですねー……流石はテレビで大々的に宣伝されていただけの事はあります」

　俺達は入場チケット販売の列に並びながら、そんなことを呟く。

　ここは『シャインピア』。以前レイがチケットを手に入れたテーマパークである。

　前々から来たいと思っていたせいか、何だか体の内側から何かが溢れてきそうな、そんな感覚が止まらない。ジッとしていられなくて、俺はさっきから、周りの迷惑にならない範囲で肩をグリグリと回したり、背伸びしたりしていた。

　そんな俺に、詠は何か言いたそうな視線をチラチラと向けていた。そしてようやく、話しかける決意をしたのか、

「ロラン、何だか嬉しそうですね」

　そう聞いてきた。

「ああ。ここには一度、来てみたかったからな」

　別段隠すようなことでもないので、俺の返答も正直なものだ。

　それの何が可笑しいのか、詠はクスリと笑う。

「そう言えば、この間レイがチケットを手に入れたって言っていた時も、目を輝かせていましたからね」

「えっ？　そんなに分かりやすかった？」

「あと、楽しみなのは分かりますが、もうちょっと落ち着いて下さいね？」

「す……すまない」

　やっばい。ちょっとハズい。

　ガキ臭かっただろうか。恥ずかしさを誤魔化すように咳払いをすると、長蛇の列が一つ進む。

　ちなみに女性陣はここにはいない。ここから少し離れたところで休んでいる。男はパシリ。一見女性に見える詠も、例外では無く男としてカウントされている。こころなしか、詠は嬉しそうだ。

　しかしあれだ。こうして詠と二人だけで並んでいると、傍から見ればカップルみたいに見えたりするのだろうか。服も女性物を着ているし。

……何となく、さっきとは違う恥ずかしさが出てきた。考えないようにしよう。

「どうしました？」

　詠が俺にそう聞き、取り敢えず「何でもない」と答えておくと、列がまた一つ進んだ。

「おー！　テレビでは見たことあるけど、やっぱでかいねぇ！」

「だねー！　最初、どこ行く？」

「ジェットコースター乗りたい。あの三回転するやつ」

「え、いきなりですかっ？」

　入場チケットを受け取って、園内に入った俺達。目の前に広がる景色に、口々にそんなことを言う。

「あっ、私あれ！　あれ乗りたい！」

「えっ？　ちょ――」

　レイが何を見つけたのか、巨大な船を指さしながらそう叫ぶ。詠の手を取ると、思いっきりそっちに向かって走り出した。

「ロラン、行こっ！」

　樹葉も俺の手を掴むと、レイの後に続く。

　若干はしゃぎすぎな気もしないでもない。昔の俺なら、間違いなく諌めるところだろう。外で、三人が俺のことを『友絆』ではなく『ロラン』と呼んでいることもそうだ。

　だが、今は不思議と注意する気にならないのだ。これが『シャインピア』の魔力なのか、それとも俺自身が『変われた』のかは分からない。

　ふと、昨日の事を思い出した。学校に着くや否や、日ノ下に「仲直り出来た？」と聞かれた事を、だ。頷くと、まるで自分の事のようにホッとしてくれたのは、今でも強く印象に残っている。

全く、できた人間だよ、あいつは。

　そんな風に考えると、少しだけ面白くて、俺はつい笑いそうになってしまった。

　ちゃんと出来るか分からないけど、これからもいい友達でいれたら、それはきっといいことなのだろう。

「ロラン、どうしたの？」

「いや、なんでも無い。気にするな」

　隣の樹葉が不思議そうな顔で俺の方を見るので、俺はそう答えた。

　気になる。めっちゃ気になる。

　レイが見つけたアトラクションの列に並んだ頃からだろうか。なんだか、周りの視線が集中している気がするのだ。良くない意味で。

　ふと、声が聞こえてきた。二人組の若い男の声だ。

「……なあ、あそこにいる女の子達、めっちゃ可愛くないか？」

「あ、分かる。特にあのロングの子、ヤバくない？」

「でも、男の方は何か普通だよな……なのに、男一人に対して女三人かよ。すげーな」

「これがハーレムってやつか……羨ましい。死ねばいいのに」

「おいバカっ！　聞こえるぞっ？　……まあ、同感だけどな」

　小声ではあるが、まる聞こえである。

「ん？　どったのロラン？」

「あ……いや、何でもない。気にするな」

　怪訝な顔で聞いてくるレイに、俺は適当にお茶を濁す。だが、心の中では頭を抱えていた。

　ヤバイ。これってつまり、やっかみの視線かよっ？

　一応俺達四人は、男二人と女二人で構成されているのだが……詠はぱっと見は女。しかも格好も女だから、変な風に誤解されるのは当然だろう。

　一応、俺はこの三人の誰とも付き合ってはいないのだが、そんなことを言って果たして通じるのか、と聞かれれば、答えはノーだ。俺が逆の立場なら、謙遜をすっ飛ばして寧ろ嫌味に聞こえる。

　よくよく見てみれば、こいつら三人は容姿のレベルが高い。

　レイはサイドテールが似合う元気っ子。

　樹葉はアホ毛がチャームポイントのポワポワしている子

　詠は女顔負けのルックスのおとなしい子。

　三者三様でタイプは違うが、思わず目を奪われてしまう男の気持ちは、同じ男として分からなくもない。

　俺よ。何故予想できなかったし……！

　その後、周りの視線が気になって、いまいちアトラクションに集中出来なかった俺だった。

　昼食時、一昨日の件で詠と、あと何故か他二人にもパフェを奢ったあたりで、ようやく視線にも慣れてきた俺は、今――

「……っ！」

「……ひっ」

　目の前に、壁を突き破って突然出てきた杭に体を硬直させる俺とレイ。

　真っ暗な空間での出来事だったので、足が竦む……というかビックリするのは仕方がないな、うん。

　そう言い訳……じゃなくて理屈を付けて、俺は取り敢えず心を落ち着ける事に専念する。落ち着けること数分、俺は何とか……じゃなくて余裕で硬直から回復したが、レイはまだ少しかかるようだ。

　それでもそれから少し経つと、歩けるようになったらしく、俺達は歩き出す。

　隣で青い顔で目を瞑ってガクブルしているレイは、意外にもこういったものが苦手らしい。最初は強がっていたが、ここに入ってから数分で俺の腕にしがみついてきた。全く、それでも『ワルキューレ』の一員かと――

「……ぁっ！」

「……～～！」

　上から落ちてきた鎌に、俺達二人は声にならない悲鳴を上げて……いやギリギリ上げること無く再び立ち止まる。

　今のはノーカン。誰がどう聞いても、俺達は悲鳴なんてあげてないはずだ……！

　ここはお化け屋敷。入るや否や床が抜けたり壁が迫ってきたりと、何だかお化けとか全く関係ない気がするが、一応分類はお化け屋敷で合っているらしい。杭とか鎌とか、他にも幾度となく入ってくる人間を殺しにきている仕掛けが満載な気しかしないのだが……こんなのでも、客が怪我をすることが無いように設計されているそうだ。全くもって、分からんものである。

　ちなみに俺……はともかくレイはこんな様子だが、他の二人はというと、

「わぁっ！　今のはちょっとビックリしたなぁ」

「いきなり地面から杭が飛び出してきましたけど、一体どういう仕掛けになっているんですかね……？」

　と、割と余裕なようだ。レイが駄目で、樹葉と詠は大丈夫。何か意外だ。普段の印象からか、てっきり逆なものかと思っていた。

　これが分かっただけでも、このアトラクションにきた甲斐がある。

「――ぎゃあっ……い、いや、俺は叫んでないぞっ？　絶対ないからなっ？」

「――変な声出さないでよぉっ！」

　なんてことを考えていたら、不意打ちと言わんばかりに天井から檻が落ちてきて、俺達は閉じ込められる。。

　別に俺が怖いからとかそんなんでは無い。断じて、だ。だが、まずはここをさっさと脱出する必要があるだろう。

隣でギュッと目を瞑っているレイのためにも、な。

檻の中で小動物のようにプルプルと震えているレイを尻目に、俺はどうやって檻から脱出してやろうか、考え始めたのだった。

ちなみに俺の目元には、ちょっと液体が溜まっている感覚があるのだが、これはきっと汗だろう。目から汗を流す、なんて話は聞いたことがないが……不思議なことがあるものだな。

　あれから無限にも続くかと思われる時間が過ぎ、俺達はようやくお化け屋敷から脱出する。

　出るや否や、レイと口論になってしまったが、後から出てきた樹葉と詠の呆れたような微笑ましいような、そんな微妙な顔を見ると、ふと自分達がとてつもなく不毛な争いをしている事に気がつき、バツが悪そうに互いに目を逸らした事で収まった。

　その後は日本最大級とも言われているフリーフォールやら、被る水の量が半端無かったウォータースプラッシュやら、目に入ってきたアトラクションに片っ端から乗っていくことに。流石に『シャインピア』は広く、アトラクション全制覇とはいかなかったが、それでも全体の半分位は堪能できたのではないだろうか、といったところで閉園時間になった。

　ここに興味はあった。とは言え、正直「所詮は遊園地」と内心小馬鹿にしていた俺だったが、今日一日でその認識を改めることになったのは言うまでもない。

「……ふぁあ」

　帰りの電車の中で、俺は欠伸をする。楽しかったが、流石に疲れてしまった。それは他の三人も同じようで、詠とレイは俺と樹葉の肩に頭を預けて寝息を立てている。まだ起きている樹葉も、さっきから瞼が重い様子だ。

　斯く言う俺も、限界が近い。

　……ああ、もう無理だわ。

　こうして俺の意識が闇に吸い込まれていき、

　気がついた時にはもう、俺達四人は結構な数の駅を乗り過ごしていた。

　その時はかなり焦ってしまったのだが……その結果、金銭的な面でかなり悩んだものの、夕食を外で食べるという誘惑に誰一人として勝てず、俺達は生まれて初めての『ファミレス』というやつを体験できたことを考えれば、案外悪いことでは無かったのかもしれない。密かに気になった、定員を呼び出すボタンを押す役目をレイに取られてしまったのは残念だったが。

　しかし肝心の、出された料理は、何故か樹葉や詠の作る料理に比べると少し劣っていたように感じた。

まあ、これも一つの笑い話に出来るのだろう。

　家に帰ってきた俺は、そんなことを考えていたのだった。